

特集：企業内診断士、定年後の世界

第4章

【定年後】

日々の積み重ねが今につながる

園田 愛一郎さん



齊藤 睦美

東京都中小企業診断士協会城西支部

独立診断士として活躍されている園田愛一郎さんに、企業内時代の活動や協会活動の観点も交えて、定年についてお話を伺いました。

【園田愛一郎さんの略歴】

1955年生まれ

1978年：国際電信電話（KDD）株式会社入社（23歳）

1997年：中小企業診断士登録（42歳）

2000年：合併により KDDI 株式会社発足
au マーケティング部担当部長（45歳）

2008年：役員（理事）就任
コンテンツメディア本部長（53歳）

2015年：UQ コミュニケーションズ株式会社 常勤監査役就任（60歳）

2017年：同社常勤監査役退任（62歳）
その後、独立診断士として活躍中

園田さんは、2017年6月に会社役員を退任後、現在は企業内時代に培ったネットワークを通じて、独立診断士として企業のコンサルティング業務を行っています。また、東京都中小企業診断士協会（以下、協会）では、城西支部の副支部長として、協会運営にも力を入れています。このように、定年後も活躍できている理由は一体どこにあるのでしょうか。

「定年後のことを考えることも大事です。しかし、企業内時代に診断士資格をどう活用

するか、そのときに携わっている仕事をいかに真摯に受け止めて業務を全うするか、ということが大事だと私は考えています」

園田さんは、このように答えてくれました。私は、まさにこの考え方が、定年後も成功している秘訣なのだと感じました。

1. 人生を変えた資格の勉強

(1) 初めての資格取得

園田さんは大学を卒業後、KDD 株式会社（現在の KDDI 株式会社）に入社します。当初は文系だったにもかかわらず、情報システム部に配属されました。当時の情報システム部は技術職、つまり完全な理系の世界であったため、「文系の自分が、なぜここに」と、



園田愛一郎さん

配属当初は驚きと不安の思いだったそうです。

しかし、園田さんはその逆境をポジティブに捉え、「どうせやるならその道を極めよう」と考えて、当時の情報処理資格の最高峰である「特種情報処理技術者（現在のシステムアーキテクト）」を取得しました。

それが、園田さんと資格との出会いであり、仕事をするうえでとても重要であることに気づかされます。資格の勉強は、業務で得た知識を体系的に整理することができる。さらに、体系化した知識は理論武装となって、実務面で最大の武器になるということです。

そして、資格の活用は、自分にも会社にも良いことではないかと、考えるようになります。

(2) 診断士資格との出会い

その後、園田さんは、ニューヨーク駐在員や官庁対応など、さまざまな部署を経て、39歳のときに、KDD 法人営業本部の企画担当責任者に就任。当時は通信が自由化されて間もない頃で、独占会社だった KDD の営業がどうあるべきかと暗中模索していました。

そのような中、営業に出向いて感じたことは、「お客様の経営課題を知り、それを解決する手段を提案しなければ、相手に響かない」ということ。サービス品質を押し付ける独占時代の論理は意味がないということでした。

どうしたら相手の経営課題を解決できるのか？ そのとき、偶然目についたのが診断士資格でした。この資格について調べていくと、とても奥が深く、多くの可能性を秘めていることがわかってきました。企業内の自分にも役立つ資格だと思ったのです。

資格の有用性を理解した園田さんは、早速、診断士試験の勉強を始め、約3年の時を経て診断士資格を取得しました。その結果、業務における課題解決力が強化され、相手に響く提案ができるようになりました。そして、法人営業の体系化を達成します。

2. 転機となった会社大合併

(1) 仕事を失う不安

このように、「努力」という苦労はありながらも、順風満帆な人生を歩む園田さんに、1つの転機が訪れました。それは、KDD が他社と合併して KDDI になるという出来事です。当時45歳だった園田さんはこのように感じたといいます。

「合併するということは、KDD の中で築いてきた価値観や自分の立ち位置をすべて失ってしまうということです。今まで築き上げてきたことが一瞬でなくなると思うと、こんなに不安になったことはありませんでした」

新会社の KDDI に残って再度自分の立ち位置を築いていくか、もしくはきっぱりと辞めて、診断士資格を生かして新たな人生を歩むか——園田さんは悩みました。普段、仕事には口を出さないご家族も、そのときの園田さんを見て、とても心配されたといいます。

(2) 会社に残る決断

当時を振り返って、園田さんは「昨年6月に退任するまで、『定年』は意識したことがないと思っていましたが、今振り返ってみると、このときの出来事が、定年になったときに近い気持ちだったと思います」と答えてくれました。自分のことはさておき、部下の身の振り方の相談にも乗っていた園田さんは、さらに資格を取得します。それは、ファイナンシャルプランナー（CFP）です。FPとは、個人の支出、資産・負債などのデータから、貯蓄、投資、年金、税金などのアドバイスを行う資格です。

園田さんは、FP 資格を活用して部下の進路相談のみならず、自分の人生の棚卸をすることができました。自分の収入や支出、自分とかかわりのあった関係先などを、体系的に整理できたのです。その結果、今後進むべき道を明確にすることができ、合併の不安も払拭されました。



モバイルインターネット新会社の社長時代のフォーラムにて

(3) 会社での達成感

新会社 KDDI に残る決断をした園田さんは、業務に邁進します。合併直後に設立したモバイルインターネット新会社の社長に就任し、診断士資格を存分に活用してその会社を成功に導きます。その間、さらに IT コーディネータの資格も取得しました。

その後、KDDI に戻ってモバイル新ビジネスの開発に携わり、2008年には53歳で役員に就任しました。そのときのことを園田さんはこのように語ります。

「診断士として独立せずに企業内を選択した以上、資格を最大限に活用して、企業内診断士を極めてみようと考えていました。役員就任で、自分の選択は間違っていなかったという達成感を味わうことができました」

「今、振り返ってみると、雇用保険を喪失したこのときが、本当の定年だったのかもしれない」と園田さんは続けました。

3. 協会の運営にかかわる意義

積極的に資格を取得し、業務に生かしてきた園田さんには、もう1つ積極的に活動していることがあります。それは、協会活動です。

きっかけは、実務補習の先生の勧めで、あまり気乗りせずに参加した支部研修部の活動でした。しかし、実際に協会活動に深くかかわっていくと、自分にとって重要な活動であることに気づきました。それは、さまざまな立場の診断士と話す機会が増え、幅広いネッ

トワークが築けるということです。

協会活動の中では、全員が診断士という共通基盤があります。そのため、企業では上司と部下のような立場でも、同じ立場で対等に話すことができます。特に協会運営にかかわっている人たちは意識の高い人が多く、園田さんは、自分とは異なる知見を持つ人、異なる経験をしている人と、忌憚のない意見交換ができることがとても勉強になったそうです。

その副次的な効果として、自分の仕事にも役立つことがわかりました。多くの業種に知り合いがいるという診断士で広げたネットワークで、容易に他企業との関係を築くことができたのです。

また、定年になるまでに、さまざまな診断士と出会い、その人数分の診断士モデルを見ることができたおかげで、今後、自分がどのような診断士になりたいのか、イメージすることができました。これは定年後に、独立診断士として活動していくうえで、とても役に立ったそうです。

このように、協会活動に深く関与することが自分にも大いに役立ち、本業と診断士活動と協会活動の相乗効果を図ってきました。



2014年城西支部大会

4. 定年後に独立診断士へ

その後、KDDI から UQ コミュニケーションズの常勤監査役に移った後、2017年6月に惜しまれながらも退任しました。

現在は、企業内診断士時代に培ったネットワークや、取得した資格を生かして、独立診

断士として活躍されています。

「会社で自分から志願してさまざまな部署・業務を経験したこと、その業務をこなすうえでさまざまな資格を取得できたことは、自分の財産となりました。また、協会の運営業務に積極的に関与することで、診断士としての幅広いネットワークを築けたことは、定年後の業務にとっても役に立っています」

日々の積み重ねを大事にして業務をこなしてきた人生観が、結果として、定年後の人生も支えているのです。

5. 新たな未来を創る

園田さんは、今後、さらに自分の得意分野を磨き上げて、専門の分野にかかわる診断士業務を行いたいと考えています。具体的には、企業内で携わったITインキュベータとしてのコンサルティング業務や、FP資格を生かした事業承継業務などです。今まで培ってきた知識、ネットワークを活用して多くの企業と接点を持ち続けたいと考えています。

また、園田さんには、もう1つやりたいことがあります。それは、協会の運營業務の中で、企業内診断士が活躍できる場をもっと作っていきたいということです。

「データでみる中小企業診断士2016年版」によると、現在、企業内診断士は7割を占めるといわれています。一般的に士業団体は、その士業専門の職業団体であり、企業内の人が7割を占める士業団体はほかにはありません。

「この他に類を見ない団体であることを生かし、ベテラン診断士のこれまでの経験・知見と、若い診断士の企業内での最新知識や経営手法などをうまくミックスすることで、すごい知の融合体ができると考えています」と園田さんはいいます。

企業内時代に診断士資格を有効的に活用できる場を提供することで、定年後もそれを生かすことができ、診断士として活躍できる場が広がるのかもしれませんが。新たなことに挑

戦する園田さんは、定年前と変わらない、やる気に満ちあふれた表情でした。

6. 企業内診断士へのメッセージ

最後に、定年までの過ごし方について、企業内診断士に向けたアドバイスを伺いました。

「独立しようか企業内に残ろうか、長々と迷っているのであれば、『企業内』もしくは『独立』と、すっぱりと決めたほうが良いと思います。どちらを選択しても、その立場を極めることが大事です。もし、『定年後に独立』と決めているのであれば、定年までの企業内での業務を、独立につながる業務に結び付けることが肝要です。十分な準備期間があれば、会社の業務を独立に向けた活動としてうまく利用することができると思います」

現在、副業、兼業が認められる方向で社会が動いており、就業規則も徐々に変わっていくと考えられます。今後は、定年前と定年後の境界線もなくなってくるでしょう。その境界をひらりと乗り越えた園田さんのように、定年前と定年後を分けて考えずに、診断士資格を積極的に活用していくことが、私たちにはさらに重要になってくると考えられます。

園田 愛一郎

(そのだ あいichろう)

1955年大分県出身。早稲田大学卒業後、国際電信電話株式会社(現KDDI)に勤務。通信サービス開発や営業に従事。1997年中小企業診断士登録。会社退職後に独立。現在は、IT企業や新規創業企業などのコンサルティング業務に従事。



齊藤 睦美

(さいとう むつみ)

1981年茨城県出身。テキサス州立ミッドウエスタン大学を卒業後、現在は大石源治税理士事務所に勤務。会計・経理業務に従事している。2016年7月中小企業診断士登録。

